

## 二学期の保育の実際

# 社会性を育てる保育



石 坂 昭 子

### (一) はじめに

二学期といえは、長い夏休みもおわり、一年の中のもっとも充実した、みどり多いものにしたいたいの教師の願いをこめて、意気込んで迎える学期ではないでしょうか。わたくしたちの園のように、一年保育であればなおさらのこと、九月から十二月にかけてのこの四か月はかけがえのない四か月といえましょう。

もちろん、はじめて集団生活に迎え入れる一学期も、小学校へ送る三学期のしめくくりも、ともにたいせつであることにはちがひありませんが、一学期を土台としたこの二学期のすこせせ方こそ、三学期へつながる、否、将来の幼児の成長につながるいちばんたいせつな時期と考えたいのです。少なくとも、わたくしは、

このような構えに立って、二学期というものを迎えております。  
—教師だけの意気込みにおわらないようにと注意しながら。

### (二) 二学期の展望

夏休みがおわって、登園してくる幼児たちの顔の中には、さまざまな姿がみられます。

「先生、わたし、盆おどりましたわ」「海へいったけど、ちっともこわくなかった」「パパとママとみんなで旅行したの」など、口々に楽しかった夏休みを報告し、元気いっぱいいなさちゃん、K子ちゃん、Y君、ひ弱そうだった顔が日焼けして、たくましさが見られるようになったT君、これ以上黒くなれませんというほどに黒光りしてますます張り切りボーイになったK君など、これら

のグループとは反対に、ただ、みんなの話を遠くの方にいて、ここにこしながらいっているM子ちゃん、柱にもたれて、ぼつんとひとりぼっちになってしまっているH君など、一学期にまた逆戻りしてしまつたような幼児たちの姿もみられます。

この幼児たちを迎えて、二学期をどのようにすごさせたらよいのでしょうか。一学期の保育について反省しながら、二学期について考えてみたいと思います。

わたくしは、一学期の大きな目標として、「まず、教師とのあたたかいふれあいの中で、集団というものに対する不安感をのぞき、新しい幼稚園という世界で、ひとりひとりの幼児が安定して、満たされた気持ちであそびに取り組み、自分を發揮してあそべるようにしたい」と願って、保育をすすめました。でも、現実の幼児を前にしたとき、この目標がどれだけ達成されたのか反省せずにはいられません。やっと仲よしの友だちをみつけることのできたH君、まだまだ友だちとうまくあそべないY君、ぼつりぼつりと話しかけてくれるようになったNちゃんなど、ひとりひとりの幼児の成長はさまざまです。さまざまな成長ながら、集団の中で生活することの楽しさが少しずつわかってきたというのが現状といえましょう。この一学期を土台として、個々ばらばらにある幼児の要求を、どう受けとめ、育てていったらよいのでしょうか。

ここでは、社会性を中心にして、友だち関係の中で、どのように受けとめ、育てていったらよいかを考えていきたいと思っています。そこで、

・ グループの中で、ひとりひとりの幼児が、自分の力を十分に發揮して行動し、あそべるようにしたい、

・ 幼児が他人を理解し、お互いの能力や感情を認めあう中で、協力的に、創造的にあそびをすすめるようにしたい、  
という、大きな柱のもとに、それぞれの幼児の発達をふまえながら、すすめたいと思います。

これらのことについて、わたくしの実践例を通して、考えていきたいと思っています。

### (三) 二学期の実践から

二学期の実践といっても、紙面の都合もありますので、ここでは、ふたつの面からみていくことにします。それで、はじめの例は、「友だち関係が広まる中でおこるさまざまな問題」をH君というひとりの幼児を通してみていき、つぎの例では、「あそびがさまざまに發展していく過程においてみられる集団間の問題」をひとつのあそびを通してみていくことにします。そして、そこにおこる問題を考えてみたいと思います。

(1) 友だち関係が広がる中でおこるまさつと成長

— H児の場合 —

i) 九月のはじめ、MとHは、相変わらず仲よくあそぶ

九月三日

一学期にやっと仲よしのお友だちMを得て元気にあそべるようになったHは、Mが唯一のたよりで、M君との交わりを通して、幼稚園生活をたのしんでいるといった感じでした。このふたりは、家は全くはなれていたので、夏休みになって、ふたりの交渉は途絶えてしまっただけに、二学期になってからのHが、はたしてうまく幼稚園生活に入れるかしら？ というのが、わたくしの不安でした。ところが久しぶりにあったふたりは、わたくしの心配をよそに、いつもの好きなレールセットをもち出してきて、嬉々としてあそびはじめたので、ほんと、安堵の胸をなでおろしました。

ii) MとHとの中に、Aが加わってあそぶようになる

九月十六日

二学期がはじまって二週間位したとき、このふたりの中に、Aが加わってあそぶようになりました。Aもどちらかというど、今まできまった友だちがなく、あっちのグループへいたり、こっちへいたりといった感じでふらふらしていた幼児のひとりなの

です。たまたまMと気が合ったようで、さかんにMをさそってあそぼうとします。MもHだけでなく、他の子ともあそびたいという要求をもっていたのでしょう。喜んで、このAのさそいに応じ、Hもまじえて、三人であそぶようになりました。

iii) 取り残されるようになるH

九月二十四日

三人であそぶようになってから、まもなくでした。Hは、口が重く、はつきりとしたことばがいえないという軽い言語障害もあって他の子に比べると、少し知的にもおくられているという幼児なのです。ですから、Mは、AとあそぶようになるとHがものたりなくなり、Aとのあそびを好むようになって、AはAで、Hをじゃま扱いするようになりました。三人が仲よくレールセットであそんでいたかと思うと、AとMが手をつないで運動場にいってしまい、Hだけが取り残されるという場面がみられるようになってきました。

Hはひとりになってもおかまいたくレールセットであそんでいるのですが、何としてもいじらしく、せっかく皆とあそべるようになったHを、何とか皆の中に受け入れてもらえるようにしてやりたいと、教師として、願わずにはいられません。でも成長のひとつの過程として、MがHだけでなく、Aという友だちを

得て、交友関係の広まりをみるようになったことはうれしいことであり、Mの成長のあらわれとして、一方においては、喜ばなくてはなりません。でも、取り残されたHをどうしてあげたらよいのでしょうか。

Mに「Hもいっしょにあそんであげて」とことばをかけてみるのもひとつの方法だと思い、「M君、Hちゃんもいっしょにあそんであげてね」とたのんでみました。すると、意外なことばが返ってきました。「だって先生、Hちゃんとあそぼうとすると、A君がおこるんだもの。Hちゃんは、のろのろしているからあそばんとこ」というもん」という返事なのです。呆然としてしまいました。Hは友だち同士の中で評価され、AはHを能力的にみて、敬遠しようとしているのです。このままではHがかわいそうだし、そうかといって、Mにむりにおしつけても、Mを束縛することになるし、とずいぶん迷いました。でもHのよさをいつか発見させてあげる場をつくり、ふたりだけであそぶより、友だち関係を広く求めるようになるのは、当然の発達なのだから、Hも受け入れてもらえるときがきつとくると思ひ、少し時期を待つことにしました。Hにはしばらくかわいそうでしたが、むりにおしつけてもだめだと思ったからです。幸いHはひとりであることもきいて気にしていないようすで、相変わらずルールセットを出して

きてはあそんでいました。わたくしにとつて、とても苦しいときでした。

iv) リレーごっこの中に入って力を発揮し、認められたH

十月八日

運動会を機にリレーごっこがやるようになりました。そして、二組にわかれて組をつくり、回旋リレーをはじめたとき、ひとりはんばになったのです。するとMが「Hちゃん呼んでこよう」と提案しました。みんなは早くあそびたいので、「M君、早よう呼んできて」とたのみました。Aもいや応なしにそれに応じました。Hがやっと、皆の中に入るチャンスを得ました。リレーのルールがわからなくてとまどうのではないかしら？ せっかく受け入れられたとき、何とか皆とあそべるH君にしてあげたい、と祈るような気持でした。

ちょうどHの前はMでした。わたくしはそつとHのところいき、「Hちゃん、M君がああ旗をまわって走ってきたら、今度は、Hちゃんが、M君から赤い棒（バトンのこと）をもらって、力いっぱい走ってくるのよ。わかった？ そして次のY君に渡すの」とくり返しくり返し話してやりました。でも何ととっても、こんなあそびを余り経験していないHのこと、心配でたまりませんでした。けれど、意外、走り出したHは、顔を真赤にして全力

疾走したのです。その早かったこと、皆はやんやの喝采で、「H君早いな」「H君ものすごく早いやんか」と大声援でした。こうしてやっと皆の中に入るチャンスを得、意外なH君の能力が認められ、リレーごっこをきっかけに、H自身も自信をもつようになり、またAもHを認めるようになって、Mは安心してHともあそべるようになりました。そしてこれを機にさらに他の幼児との交友関係も広げられるようになりました。

わたくし自身、どうしようかと何べんかなやんだだけに、この思いがけないHの能力の発見と、その中で、友だちに認められたことは、とてもうれいことでした。ひとりひとりの幼児がもっているよきというもの、可能性というものをひき出す努力は、常にしてやらなければならないこと、また、二学期ともなれば友だちの中で認められることの意義がいかに大きく、そのことの意味を今さらながら深く感じさせられ、考えさせられたのでした。

(2) あそびの発展の中にみられる、ひとりひとりの成長と、集団としての成長ーのりものあそびを通してー

i) グループとグループとの交渉をもってあそべるようになる

十月三日～十月七日

運動会もおわり、今まで戸外での活動が多かったことの反動で

しょうか、大積木を全部使って、大きな自動車をづくり、お客をのせてあそぶという、一学期でもするようなあそびが、Iを中心に、五人のグループではじめられました。「I君、ここともっと広くしよう。ええやろ?」「運転するところ、そんな三角おいたらあかへんわ」「これハンドルにしよう」など、そのときどきに応じて、Iを中心に話し合い、相談しあってあそびをすすめていました。ハンドルには何を使うのかしら?と思っていましたら、

ペアブロックをつないで適当な大きさの輪をつくり、それをハンドルにしたててあそびだしました。とても感じがでていておもしろい思いつきだと思いました。愉快そうに、そのハンドルをまわして、「ブーブー」と口ずさみながらしていると、皆もさそわれるように、「入れて」「のせて」と入ってきて、こんな単純なあそびでしたが、けっこう楽しそうにあそびがすすめられました。

そのすぐ横のコーナーでは、ままごとコーナーを食堂にしたて、S子とK子が中心で食堂やさんがはじめられていました。わたくしは、何とかこのふたつのグループが交渉をもつようになつて、あそびが発展したらいいなあと思いましたが、しばらくは、それぞれのグループがそれぞれのあそびを楽しんでいるという状態でした。でも、それぞれのあそびが十分楽しめたら、きっと発展の姿としてふたつのグループが交渉をもつようになるだろう

と、あせらずに待ってみました。

やはり予想どおり、三日目でした。Iが「食堂へいってこようか」とM夫に話しかけ、「ここで、お昼の休けいにします」といったのです。お客になっていた幼児も、どっとその食堂におしかけ、「カレーください」「ホットケーキ」など、それぞれのものを注文していっぺんに食堂やさんは大繁盛となり、部屋中が活気づきました。

一学期にも、よくにたケースであそんだこともありましたが、ひとつひとつのグループがはつきりと独立していて（メンバーなど含めて）それぞれになされていたあそびが交わるというのは、やはり二学期の姿だと思いました。このふたつのグループ間の交渉がやがてメンバーの交流へと発展し、「ぼく、今日は食堂の人になるわ」「わたし、お客するわ」など、さらに入りまじってあそばれるようになりました。

ii) 自主的に役割交替をして、あそべるようになる

十月九日

教師としては、メンバーの交流をもったこのあそびが、もっと深まらないだろうか、発展させたいと思いつながら、いつものわるいくせを出して、あそびたいといけなさと自分にいきかせながら、見守っていたのですが、いっこう切符やお金の要求もなく、

自動車にのったり、食堂にいたりというあそびにとどまっていた。 (わたくしのクラスの特徴でもあったのですが、町別学級編成のため、団地の子と、純農村の子がほとんどで、お金といったものあまり関心がない環境におかれていたことも一因だと思います) もうこちらから働きかけようかしら? とさえ思ったときでした。じっと乗っているだけの自動車に、そういつまでも興味をもてるはずがありません。活動的なKが、「輪をつないで、きしゃにかえて走るのにしよう」と提案したのです。でも、その日はあいにく雨ふりでしたからテラスしか走れず、あまり好ましくないなとわたくしは内心思ったのですが、せっかく動きたい要求をもち、あそびが発展するチャンスなのに、制止することはなれないと思いついて、「スピードだすぎないようにしてね」といって、輪を出してやりました。

一学期も、この輪をつないでのりものがはじまったのですが、そのときはやたらと運転手や車掌になりたがって、お客をのせるどころでなく、ただ、走りまわるあそびにおわっていたのですが、またやりだしたというわけです。でも、一学期のようなことはなく、案外スムーズに運転手と車掌がきまって、IとM夫の組、KとSの組という二台が走り出しました。はじめのうちにはよかったです、が、「ぼくも運転手にさせてほしいわ」というBの

発言で、皆の中から、役割を交替してほしい要求が出ました。一期はこんなとき、どうしてもゆずり合うことができず、結局、あそびが消滅してしまうという結果になってしまったのですが、今度はどうするかしら？ と、その結果をそっと見守ってみました。するとIが、「うん、ええわ、くるーとまわってきて駅にきたらかわるのにしような」と他の三人にいつてくれました。他の三人も、うなずいてこれを認めたので、あそびは混乱することなく続けられました。わたしは、ほっとしながらも、実際にかわる場面に来て、争いがおこらないかしら？ とちょっと心配でしたが、ひとまわりしてくると「つぎだれかするやわ」と話し合いどおり交替がされて、あそびがすすめられました。

Iというリーダーが、皆からも認められている存在であったので、スムーズにあそびがすすめられたともいえますが、まわりの幼児たちもそれになっとくするだけに成長してきてくれたのだなと思ひ、うれしく思いました。

でも、全部の幼児がこれで満足したとは、到底いえません。そこで、ぜんぜん参加できない幼児もいましたので、部屋中いっぱい紙をつないで、その上を自由に筆を走らせて画面の上で、思う存分走りまわるといふ場も一方においてつくってやりました。

全身運動としてのあそびと、画面での作業では全く異なった質の

ものですが、幼児たちの気持の中ではそうかわりなく、満足感を与えてやったのではないかと思ひました。

iii) ひとりひとりの幼児が、グループ内で自分の力を発揮し、

役割を分担して協力的にあそびをすすめるようになる

十月十日〜十一月六日

翌日は、お天気だったので、運動場を元気いっぱいいきしゃが走り出しました。がぜんふんいきが出たのでしょう。クラスの大部分の幼児が参加してあそびました。そのうちに、世話好きのKが、運動会るとき使った旗をもちだしてきて、「赤ですからストップ」とやりだしたのです。Kの突然の信号機出現に、わたしもはっとしてかたずをのみました。ところがいつもはふぎけることが大好きで、どちらかというところ、めちゃくちゃをしたがる丁男の運転手も、ちゃんとKからさし出された信号機の前にとまって、その旗が上がるのを待つのです。単調だったあそびに変化をもたらしたこのK君の発案の信号機は皆の歓迎するところとなって、一段とあそびが活発になりました。

それに伴って、他の役割も、自然な形で、だんだんとできました。かいたり、作ったりすることの好きなN夫が、「切符作るに」と提案したことから、女兒のK子、M子、Y子らに加わって、切符づくりのグループができ、その影響でお金を作るグルー

プもできて、切符きりをする人、切符を売る人とだんだん役割がわかれて、あそびがすすめられるようになりました。そして、ただ役割が分担されるのでなく、ひとりひとりが自分の能力をだしきって、グループの一員として活動するようになったということが、わたくしにとってうれしいことでした。

例えば、前述のN夫は、ふだんは目立たない存在なのですが、切符作りを提案し、たんねんに切符をつくることから、自信もち、皆も「N夫ちゃんの作った切符ほんとのみたい」など認めてくれたので、いっそう喜んであそびに参加するようになり、消極的だったS男は、走ることにかけては自信があったので、運転手という役割をひきうけて、見違えるようにいきいきと活動しました。どちらかというところ、従属的な立場に立ってあそぶことの多いS男だったのですが、自分を力いっぱい発揮する場を得て、今までかくされていた積極性といった面も、少しひきだせたのではないかと思います。

また一方、女兒の経営する食堂は、ラーメン50えん、さんどいっち100えん、ほっとけーき30えんなど、ひらがなばかりでかかれました、こまかい値段表までできて、走りまわってきた運転手や車掌さん、お客さんのよい休憩所として大繁盛し、お互いが交渉をもつてあそびが続けられました。ままごとというのは、幼稚園時代

の女兒にとっては、あくことなくあそばれる活動だけに、それを孤立させてしまわないで、他との関係をもつきっかけえ作ってやれば、いっそう興味をもち、女兒らしいよさを発揮して、集団の中の位置を得て、あそびを楽しくさせてやることができるわけで、教師としての援助のたいせつな場ではないかと思えます。

このような経過をたどりながら、あるときはクラスのほとんどが参加し、あるときは、五、六人の幼児たちで、ほそぼそと走りまわっている（このほそぼそとしている日に、今までしたことのないような、どちらかというところ、中心的グループからはずれた、気のよわい幼児たちのグループが、けっこう楽しんでいてという風景もみられました）といった変動をみながら、また、二日ぐらい忘れたようにきしゃが走らなくなったなと思うと、思い出したように、机をテラスや運動場にもちだしてあそびがはじまるといった状態で、十一月の下旬まで続けられました。そして、のりものが、だんだん室内の製作活動を中心としたあそびにかわって、食堂やさんは依然存続のまま、お店やさんのあそびに移行していったのでした。

#### (四) まとめと指導上の問題点

二期期の活動をおいながら、ふたつの面から、実践例をあげて



みましたが、後者の場合表面にでた活動をおいすぎてしまったよう  
うでその中に残される問題もたくさんあり、教師としてこれらの  
問題を見逃さずしっかりと受けとめていくということがたいせつ  
だと思えます。

例えば、ある一日の中で、全くのりものあそびに参加していな  
い幼児たちは、どんなあそびをしているかということ。運動  
場の片隅で、四、五人集まっている男児のそばにいってみると、  
虫集めをし、そこに家を作ってやったり、草をおいてやったり、  
水をやったりして、虫を中心として、そのグループが仲よく協力  
しあっていたり、ゲームづくりをしていたT夫たちのグループは、  
大きい箱や小さい箱をいろいろに組み合わせ、それぞれに頭を  
ひねりながら、ルーレットのようなおもちゃづくりをしていた  
り、女児のグループでは、楽器をもちだしてきて、合奏をした  
り、レコードにあわせて、四、五人でリズム表現をしたりといっ  
たぐあいで、それぞれにあそんでいるわけです。

わたくしたちは、ともすると、(否、わたくしたちの場合だけ  
かもしれませんが) 中心的な活動からはずれる幼児たちが気にな  
り、何とか皆の中に入れることを望むあまり、強いさそいかけを  
してしまうのですが、この幼児たちの活動をじっと見守ってやる  
と、その幼児たちなりに、やはり二学期のグループだなど思わせ

られるような協力的なあそびをしているものです。その幼児たち  
にも、ことばをかけてやり、いっしょにあそんでやったりして、  
こういう小さいグループの活動もたいせつに育ててやることも忘  
れてはならないことだと思えます。

また、大ぜいの中には、はじめの例にあげたようなH児のよう  
な幼児もあり、あそびから取り残されてしまったり、自分の思う  
ようにならないために、そつとあそびの仲間からぬけだしてしま  
ったり、反対に攻撃的になったりするということはよくあること  
で、そういうひとりひとりの発達をふまえて、それらのことを教  
師として、しっかりと受けとめてやり、みかけだけの高度なあそび  
をおったりせず、教師と幼児、幼児と幼児とのあたたかい人間の  
なふれあいを基盤にしながら、幼児たちにかげがえのない二学期  
を、より充実した、より豊かな経験や活動をさせることができる  
よう、教師としての援助をしていきたいと思います。

いずれにしても、二学期における社会性の発達には、幼児と幼  
児とのふれあいを通してその中で、お互いを認めあいながら、協  
力してあそぶということが、とてもたいせつだと思えます。

そのためにも、教師と幼児とのあたたかい人間関係が、その基  
本にならなければならぬと思えますし、それが、社会性を育て  
る指導でもあると思えます。

(四日市市立泊山幼稚園)